

焦心録後に題す（高杉晋作）

内憂外患迫吾州 正是存亡危急秋  
唯爲邦君爲家國 焦心碎骨又何愁

内憂外患 吾が州に迫る

正に是れ 存亡 危急の 秋

唯 邦君の 爲 家國の 爲

焦心 碎骨 又何ぞ 愁えん

解説 幕府が政権に固執し、尊王擁夷派の中にうちわめめや分裂が生じて国内は混乱し、外国からは軍艦で威嚇される等、内憂外患が噴出し、正に危急存亡のときに当たって、志のある者は身分を問わず、心を一にして事に対処すべきである、と、若い藩士達に「焦心録」を書いて激励した。この詩は、その後に作られたもの。

語釈 ※内憂外患Ⅱ内の憂いと外からの患い。 ※吾州Ⅱ吾国。

※存亡危急Ⅱ一国の存亡のわかれ目。 ※秋Ⅱ季節のあきを意味しない。このような場合に限って「とき」と訓じている。

※邦君Ⅱ藩主。 ※家國Ⅱ国家。 ※焦心Ⅱ気をもみ、焦慮すること。

※碎骨Ⅱ身を粉にして働くこと。 ※愁Ⅱ気にかける。

通釈 内憂外患が、次から次へとわが国に迫っている。今こそ、国家の危うい大切なときである。そのときに当たって、藩主のため、国家のために一身を顧みずに尽くすだけだ。ほかに何を悩むことがあるう。